
One year Of life

夜河心太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One year Of life

【Nコード】

N3299Z

【作者名】

夜河心太

【あらすじ】

極普通の日々を過ごしていた山田直樹。中学3年生。の親友の島原光太。ある日事件が起こり、直樹が犯人扱いを受ける。だが、それを庇う光太が犯人だと嘘の証言。

その日から光太のいじめが始まり、光太は自殺。

光太が死んだのは自分のせいだと思い込むようになってきた直樹は、自殺を決意。だが、ラルナという少女に助けられる。

「死ぬよりは生きてるほうがいいに決まってるでしょ」

そうして直樹はある世界に飛ばされた。

そこには何もかも新しい世界が待っていた。

ある世界の、直樹の物語が始まる。

ブログ1（前書き）

初めまして。

夜河心太です。初投稿となります。

というかこういうの事態初めてです。（汗）
がんばって書いていこうと思いますので、
見ていただけたら、うれしいです。

プロローグ1

いつもと変わらない日常。学校行って、友達としゃべって、帰る。
「勉強なんかしなくたって、生きていけるさ」

そんなことを考えてたらいつの間にか中3。

後悔はしてないけど、ちょっとした罪悪感がある。

いいんだよ。うん。きつと。

今が楽しけれや、きつと。

俺は山田直樹^{やまだなおき}。とある学校の中学3年生。

「おい。帰ろうぜ」

話しかけてきたのは、島原光太^{しまはみつた}。

中3になってから急に仲良くなった。頭が悪い。

「んなこと言ってもな……。俺委員会の仕事あんだけど」

「お？そうか。なんなら手伝うぜ？」

「手伝うんだったらちよつとは勉強してくれよ」

「なんだと！？貴様親友の心使いを無視する気か！？」

「分かった分かった。じゃこれ運んでくれよ」

「……。これ全部？」

俺は勉強はあまりしないが、平均はいつもいっている。

とまあ、いつもこんな感じで過ごしている。

これが変わるはずはないと思ってた。

……。この関係を、崩したくなかった。

プロローグ2

「じゃあなーまた明日」

「おう」

いつものように学校の帰り道。俺は光太と別れ、家に向かう。

「寒いなー。うー寒い」

今は11月の下旬。もうじき冬だ。

「ん」

たしかあいつは・・・同じクラスの日向ひゅうががいた。
なにしてんだろう。

「おーい。ひゅうがー」

「おわあっ!?!」

「・・・そんなに驚くなよ」

「す・・・すまん」

「んで何して・・・ここ誰んち?」

「お・・・お前には関係ねえよ・・・」

「なんだよー。あ、まさか愛の告白って奴か!？」

「ちっ!!!!!! 違えよ!!!!!!」

「・・・そうか。まあ頑張れよ」

「おまつ・・・!」

俺は家に向かった。俺の家族は俺と母ちゃんだけ。

離婚して、父ちゃんが姉ちゃんを引き取った。

俺は引越したくなかったから、母ちゃんについていったただけだ。

「姉ちゃんどうしてるかなー」

そんな感じで家に着いた。

「ただいまーおかえりー」

母ちゃんは帰ってくるのが遅いからこんな寂しいヤリトリをしている。

悲しくなんか・・・ないんだからね・・・。

「寝るか」

俺は布団に潜り込んだ。

目が覚めたのは2時。(朝)

「ん・・・母ちゃんまだか・・・」

俺はコンビニへ向かうことにした。腹が減ったから。母ちゃんはいつも帰ってくるのが遅い。こんな時間でも帰ってこないから結構息子としては心配している。

自転車を飛ばし、おにぎり2個とあんまんを買ってまた自転車へ。

「とれーんとれーん走っていーけ」

独り言が多いのは癖だよ。気にしないで。

「・・・なんだ？」

暗いのに明るいところがあった。

「火事か!？」

俺は自転車と飛ばして近くへと向かう。

そこは日向と別れた家だった。

「!?!」

もう遅い。火が家全体を燃やし、どうしようもない状況だった。

すると、家の庭から、男が走り去って行った。

「あつ! 待てよ!」

男は俺の自転車を奪い、猛スピードで逃げ去っていった。

「俺の飯がああああああ」

追いつかないほど、男は離れて行った。

「・・・とりあえず消防車を！」

俺は携帯電話を取り出し、消防署にかけた。

まあ俺より前に電話した人がいたらしく、早くに消防車が到着した。

俺は警察に事情聴取をされるなど、面倒くさいことになっていた。

「ハア・・・」

もう4時をきていた。中3が夜遅くにうろつくな。勉強しろ。
とか罵倒されるはめに。ちえ・・・。

「オイ兄ちゃん・・・ちよつといいか？」

俺は自分を恨んだ。

（腹が減ったなら冷蔵庫ん中の調理すればよかったのに）

（なんで中3が夜遅くに・・・勉強しとけばよかった）

（なんで不良みたいないな人に絡まれてんだ俺？というか集団は卑怯だろ
一人でこいよ。一人で。いや、俺喧嘩かなり弱いよ？）

俺は廃工場に連れていかれ、気づくと、病院のベットの上にいた。

プロローグ3

俺は、病院で過ごしていた。しばらくの間。

医者に呼ばれて行ってみると。院長？的な人が真剣な顔で

「・・・いいか？これから話すことをちゃんと受け止めてほしい」

驚いたよ。声がでなくなっただなんて。

もともと俺は体が強いほうではなかった。

小さいころ「いつ倒れてもおかしくない」なんて言葉聞いてから
頑張っ生きてようと思っていたけど。

病名は良く分からない。一生しゃべれないらしい。

まさか喉の病気だったのか？知らないけど。でも喉の病気なんかで
いつ倒れてもおかしくないは・・・ああ。わかんない。

でも一番は、友達や家族と話せなくなることが悔しかった。

小学校のころは、友達が少なく、中学校で、目立たない存在だった
俺を

助けてくれたのも光太だったし。母ちゃんにも迷惑かけてばっかだ
ったな。

思い返すだけで涙が止まらなかった。

別に死ぬわけじゃないんだぜ？ 分かってる。

じゃあ悲しむことないだろう？ 分かってんだよ。

自分でもなんで泣いているのか分からない。ただ、悲しかった。

俺は退院した。母ちゃんは俺の入院しているときも、来なかった。まあ仕事が急がしいんだろう。しかなたい。

携帯には、10件以上のメールが来ていた。幸せ者だな。俺。

だが、入院を始めて3日からは、一通もメールが来ていなかった。

俺は今まで通り、普通にいつもの道を自転車で行く。（買った）

やっぱりしゃべれなくなるのはちよつとキツイけど

今まで通り、接してくれるかな？

転校してきた時と同じような悩みを抱え、学校に到着。階段を上り、クラスの前に着いた。

（気持ちを切り替えて頑張ろう！）

俺は扉を開けた。

一瞬静まり返る教室。だがまた話や笑い声が始まる。

・・・なんだろう？この空気は。

俺は光太のところへ行ってみるも、こちらをチラ見し、どこかへい

ってしまった。

おかしい。何かがおかしい。

俺はいままで通り、授業を受け、放課後。

俺しかいなくなった教室。心が締め付けられるような痛み。

なんでこんなことになったんだろう。思い当たるのが全くない。

「直樹。ちょっといいか？」

光太だった。俺は光太と一緒に屋上へ向かう。

「コレ。見てねえのか？」

差し出されたのは携帯で、そこにはこの学校の裏サイトのチャットがあった。

「・・・」

答えることができない俺だが、そこには俺に対する悪口が大量に書かれていた。

『あの本田の家の火事の犯人、山田だろ？本当、最悪だよなー』

『本当。加奈子の身にもなってほしい』

本田加奈子？あの家の子だろうか？

『今度からアイツ無視しようぜ？まじきもいし』

『賛成くさつさと消えろつての』

光太が俺に問いかける。

「・・・コレ。本当にお前がやったのか？」

俺は首を横に振った。

「・・・だよな。俺はお前がそんなことするとは思えない」

じゃあ光太が俺を避けていたのは、俺としゃべっている光太が目をつけられるから・・・？

「お前はしゃべれなくなったから、悪口なんていいたい放題だ」

「・・・」

「ふつ。そんな顔するな。安心しろ。俺がなんとかしてやる」

「!？」

俺はとつさに携帯に文字を入力して光太に見せた。

『やめてくれ。俺のせいでお前が傷つくのはいやだ』

「大丈夫。俺に任せろつて。明日も学校こいよー」

そういうと、光太は、帰って行った。

俺は何も言えなくなった。ただの無口な人間になった。
だが、こうやって俺を守ってくれる人がいることがなによりも嬉しかった。

その反面、嫌な予感がした。

その次の日も、俺は無視をされていた。

朝休み机に座っていると

「おい。皆。聞いてくれ」

光太がクラスの多くの人に呼びかけた。

「どうした？島原？」

クラスの男子が声をかける。

「大事な話がある。」

「大事な話？」

俺は黙って耳を傾けた。

「本田の家を燃やしたのは、俺なんだ」

プロローグ3（後書き）

プロローグ・・・？っていうか、
この前書きの長い奴。もう少し続きそうです。
すみません。（汗）

プロローグ 4

「・・・え？」

クラスの皆は驚きを隠せなかった。俺が見たアイツは、光太だったのか・・・？

光太がそんなことするはず・・・

「じゃ・・・じゃあ、証拠は？」

そう。誰もが聞きたかったのはこれだろう。

証拠もないのに言っても、ただのデタラメにすぎない。

「証拠・・・ねえ。じゃあ、コレ」

そうすると、光太は携帯を皆に見せた。人がぞろぞろ集まってくる。

それは動画だった。

「・・・！！」

動画で、本田の家を火事にする実況みたいなのをしていた。

「・・・もともと俺はアイツが嫌いだった。さっさと死んでほしかった。

まあ。どっかへ出かけてたらしかったけどな」

嘘だ。光太がそんなことするわけがない。

皆が黙り込んだ。

「まあ、警察はまだただの火事とでも思っているだろうな」

光太は、俺を庇ったのか？

俺は何もしゃべれない。そんな俺を庇ったのか？

「つつ！！」

俺は放課後。光太をつれ、屋上へ向かった。

「なんだ？俺が本当にやったと思ってるのか？」

俺は首を横に振る。

「・・・まあ。いいか。俺はお前ともう一人。庇うことに決めたんだ」

もう一人？誰だろう。

「まあそのもう一人の奴が、火事にしたんだけどな」

「俺はしばらく学校にはこれない。お前は、信頼を取り戻すことを頑張れ」

そういつて帰ろうとした光太を引き止めた。

「・・・なんだ？」

俺は即効で携帯に文字を打ち込む。

『格好つけてんじゃねえよ。お前が庇う必要もないだろ？』

「たしかにそうだ。でもな、そいつがしたことは悪い。

だが、そいつを見る目が変わって周りの人が

そいつをいじめることになるのはもつと嫌だ」

バカだ。馬鹿すぎる。やったがそいつが悪いんだから、ほっとけばいいだろうに。

「俺は人助けが好きなんだろうな。ははっ。まあお前は全く関係がないのに

巻き込んでしまったのは謝る。すまない。じゃあな」

その日以降。光太は2週間ほど、学校を休んだ。

俺は少しずつ、信頼を取り戻しはじめた。でも、嬉しくはなかった。俺は声が出なくても、何かできたんじゃないのか？
今更遅い後悔をする日々が過ぎて行った。

光太がこなくなっただけだったある日。

「おい。朝礼は始めるぞー」

普通の日常を取り戻した。だが、俺の気持ちは晴れなかった。

「・・・お前らに、伝えることがある」

「島原が、亡くなったそうだ」

クラスがざわめく。ことはなかった。

「・・・それだけだ。」

俺は吐きそうになるほど、苦しかった。

「出席とるぞー浅川ー」

予想はしていなかった。あの気の強い光太だったのに、最悪だ。なんでこんなことになるんだろっ。

そしてクラスの反応

あれは必ず何かありそうだ。

俺は家に帰り、携帯で学校の裏サイトへいった。

そこには・・・

『ついに死んだかwwwwww』

『自殺らしいねwwwウケルーー』

『ごまあ W W W W W W W W W W』

ど・・・どういことだ？急いでチャットすべてのコメントを見る。

俺は理解した。この事件についてを。

プロローグ5

俺は次の日、日向に声をかけられた。

そして、チャットの中だけでは分からないことを、すべて教えてくれた。

光太は、俺と日向を庇った。

その前に、本田の家が火事になったとき、本田は自殺していたらしい。

犯人は日向だった。そんな日向を光太は庇った。

もともと本田は、男女共々、信頼がとても厚かった。

光太も信頼は厚かったが、本田ほどもなかった。

皆は「自殺したのは、火事をした奴のせいだ」そう思う。

俺と日向を庇っているの、まずは俺が犯人扱い。

そして、光太が告白。あとは・・・分かるだろう。

そして、光太は自殺した。

「すまない・・・・・・・・・・・・・・・・」

泣きながら、俺に土下座をしてきた日向。

心の底からこいつを恨んだ。だが、時は遅い。

「おい。何読んでんだ？」

「本だけど・・・？」

出合いはこんな些細な会話だった。
それから俺と光太は仲良くなった。

そして光太の周りの奴たちとも、俺は仲良くなれた。

全部、光太のおかげだった。

めちゃくちゃ感謝している。

そんな恩人が、自殺した。

俺は生きることはどういうことか、考えた。

分からなかった。俺は一晚中声のない泣き声を上げ続けた。

俺は生きることの意味をなくした。

「電車が到着いたします。黄色の線より内側によってください」

俺は電車の通る線路へ飛び降りた。

「お・・・おい！君！何をしている！？」

俺をとめる声だろうか。ありがとう。おじさん。
母ちゃん。ごめんな。長生きしてくれよ。仕事は辛いと思うけど。
日向。お前は自分の罪をちゃんと償え。

俺は、自殺を決めた。

電車が俺を通過した。

はずだった。

「ん・・・・・・・・・・？」

「気がついた？」

そこには、女がいた。

「ここは・・・？」

真っ白い。奥行きが全く見えない場所にいた。

「全く・・・バカな男もいたもんね」

その女は中学・・・か小学校高学年の女。長い黒髪が特徴的で、
白いワンピースをきていた。

俺は体勢を直し、体操座りをした。

「俺は・・・死んだんじゃないのか？」

「アンタが死ぬ直前に、ここに連れてきたわけよ」

あきれた顔で言う。

「・・・だよ・・・」

「ん？」

「なんで俺を放っておかなかったんだよ!!!!!!」

「はあ！？アンタ助けてもらった人に対して何言ってるのよ！？バカ！！！」

「うるせえ！誰も助けてくれなんか・・・言ってるええだろ・・・」

急に思い出した。ここに来る前の記憶を。

「ハア・・・アンタとことんバカね。大バカよ」

「・・・・・・んだよ」

「死ぬよりは生きてるほうがいいに決まってるでしょ」

俺は顔を上げた。

「あのさ・・・パ・・・・・・パンツ・・・」

「え？きやあああああああああ！！！！なっ何見てんのよ！！」

ひっぱたかれた。

「つてえ……………」

「あっアンタにチャンスを与えようとしていたのにつ！！変態！！」

「ちゃ……んす？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3299z/>

One year Of life

2011年12月13日20時46分発行